

ハスに託した恋心

経営学部
矢田 博士

ハスは、夏に美しい花を咲かせるばかりか、秋にはその根や実（種子）が食用にもなるため、中国では古来、身近な植物として人々に親しまれてきた。とりわけ水郷地帯で知られる江南地方の池や湖では、必ずといってよいほど水面に浮かぶその姿を目にすることができる。

ハスは部位によって様々な呼び名があり、中国最古の字書とされる『爾雅』巻八「釈草」篇に、以下のように言う。なお、[] 中の記述は、東晋時代の郭璞という人が付けた注釈である。

荷、芙渠 [別名芙蓉、江東呼荷]。其莖茄、其葉蓮、其本密 [莖下白藕在泥中者]、其華菡萏、其實蓮 [蓮謂房也]、其根藕、其中的 [蓮中子也]、的中薏。

《荷は、芙渠 [別名を芙蓉といい、江東地方では荷と呼んでいる] のこと。その莖を茄、その葉を蓮、その莖の根本の部分に密 [莖の下の方の泥の中にある白い根茎のこと]、その花を菡萏、その果托を蓮 [蓮は種子を収める房状の果托をいう]、その根を藕、果托の中にある種子を的 [蓮の中にある種子のこと]、種子の中心にある胚芽を薏と、それぞれ言う。》

ではここで、ハスを詠った詩を一首、紹介しよう。

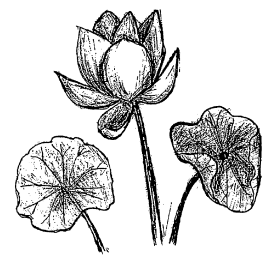
青荷蓋緑水	青荷 緑水を蓋い
芙蓉披紅鮮	芙蓉 紅を披いて鮮やかなり
下有並根藕	下には根を並ぶるの藕有り
上生並目蓮	上には目を並ぶるの蓮を生ず

この詩は、南朝の宋から南齊の頃にかけて、江陵（湖北省荊沙市）を中心とする長江の中流域、および襄陽（湖北省襄樊市）を中心とする漢水の上流域で流行した「西曲歌」と呼ばれる民間歌謡の一つで、「青陽度」という題で今日に伝わる。これらの都市は、水上交通の要衝の地であったことから、南朝の頃から商業都市として発達し、また歓楽街として知られるようになった。街には多くの妓楼が軒を連ね、商人たちが盛んに利用したという。「西曲歌」には、男女の恋愛をテーマとしたものが多い。おそらくそれは、訪れてはすぐ去っていく、つれない商人を相手にする妓女たちによって歌われたものが多く含まれているからであろう。ここに挙げた「青陽度」は、五言四句からなる古詩で、偶数句末の「鮮 (xiān)」と「蓮 (lián)」とで押韻する。

青々としたハスの葉が
緑色の水面を覆い、
淡紅色に咲くその花が
目に鮮やかに映し出される。

前半の二句は、目の前に広がる実景、ここでは水面に浮かぶハスの姿を描く。荷の葉の「青」、水の「緑」、芙蓉の花の「紅」といった色彩語の多用は、読者の視覚的イ

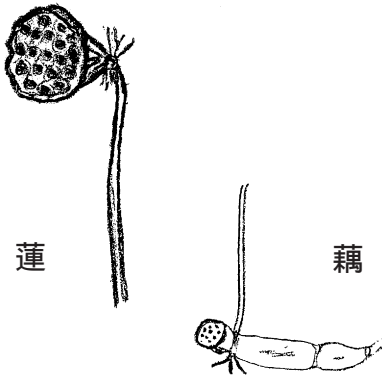
メージをふくらませる上で効果的であろう。ハスの葉の青色と水の緑色とが背景にあるからこそ、淡紅色であっても花が際立って目に鮮やかに映るのである。極めて絵画性に富んだ句であると言える。



水の下にはハスネが二つ、
仲良く並んでふくらみを増し、
水の上にはハチスが二つ、
左右の目のように並び立つ。

後半の二句は、眼前の実景としてではなく、これから先のハスの生長過程を想像したものと捉えるべきであろう。「並」という同じ漢字が使用されている点に、やや素朴さを感じさせるものの、比較的きれいな対句を構成している。「藕」は、ハスの根のレンコンとなる部分をいう。「蓮」は、花が枯れた後にできる、多くの実（種子）をたくわえるための果托をいう。その形状が蜂の巣に似ていることから、ハチスとも呼ばれる。

夏に色鮮やかに咲き人々の目を楽しませていた花も、やがては枯れてしまうが、その代わりに秋になれば「蓮（果托）」には多くの実（種子）がなり、根の先端はふくらんで「藕（レンコン）」となる。今度は実（種子）と根とが食用として人々の舌を楽しませることになるのである。



さて、「青陽度」という詩について、ひとまずは以上のように解釈してみたが、この詩の解釈をここで終わらせてしまったのでは、この詩の面白みは半減してしまうであろう。

実はこの詩には、後半の二句に、ある仕掛けが施されているのである。前半の二句が色彩語の多用によって視覚面に訴える効果をねらったものだとすれば、後半の二句はそこに施された仕掛けによって聴覚面での効果をねらったものだとと言えるであろう。

では、どのような仕掛けが施されているのか。種を明かすと、三句目の句末の「藕(ǒu)」の字が同音の「偶(ǒu)」の字を連想させ、同様に四句目の句末の「蓮(lián)」の字が同音の「隣(lián)」の字を連想させる、といった仕掛けが施されていたのである。いわゆる「掛け詞」に似た修辞技法で、中国ではこれを「双関語」と呼んでいる。

「偶」は、「つれあい、配偶者」の意。「隣」は、「愛しむ」の意。つまり、後半の二句には、「たとい盛り時期が過ぎたとしても、いつまでも夫婦として寄り添って愛しみあいたい」といった、おそらくは女性の恋心が託されていたのであり、この詩もやはり男女の情愛をテーマとしていたのである。

試験に絶対出ない英単語

経営学部
安藤 聡

・chad: 「紙に穴を開けたときに残る丸い屑。」こんなものにまで名前があったという事実に感動を禁じ得ない。ちなみにこの単語は『プログレッシブ英和辞典』（小学館）にも掲載されているが、定義は「チャド、(パンチカードの)さん孔くず」となっている。「さん孔」は正しく書けば「鑽孔」であり、『新明解国語事典』（三省堂）によれば「堅い岩、鉄などに穴をあけること。[広義では、紙のテープに穴をあけることや、パンチカードにパンチを入れることをも指す。]」である。だからchadを強いて日本語で言えば「鑽孔屑」ということになるが、口頭で言ってもおそらく通じないであろう。